

不 動 岡 高 校 新 聞

発行所
埼玉県加須市不動岡1-7-45
埼玉県立不動岡高等学校
編集・発行・印刷
不動岡高校新聞部
部長 小林 (2年)

ミイラから学ぶ死生観

世界から集結した43体

十一月一日(金)に、国立科学博物館で特別展「ミイラ」の報道陣が詰めかけた。十一月二日(土)から来年二月二十四日(月・休)まで行われる。

他者の為に ミイラになった人々

特別展「ミイラ」では世界から集められた43体が地域別に分けられ、展示されている。

東アジア・オセアニア地方の展示で特筆すべきは、やはり日本のミイラではないだろうか。

まず、目を引くのは法衣をまとった即身仏の「弘智法印 宥貞(こうちほういん ゆうてい)」である。極限の悟りを開くために自ら食を断ち、石棺に入ったのだそう。心なしか優しい表情を浮かべているように見える。



↑ほとんど皮膚しか残っていない「ウェーリングメン」

謎多き 湿地のミイラ

ヨーロッパ地方の目玉は、オランダの湿地で発見された湿地遺体の「ウェーリングゲメン」である。ほとんど皮膚しか残っていない。大きさは二体で一對のような姿から男女のカップルと推定されていた。しかし、分析の結果、男性同士と判明した。未だ死因は分かっていない。(岡部)

ミイラにされたのは 人間だけではない

古代エジプトでは、来世で復活するためには肉が必要とされ、ミイラづくりが行われたという。そのため高度な技術が発展し、細部の豪華な装飾によって、死者の個性を表すまでになった。



↑スペシャルサポーターであるビートたけし氏

人々を見守る 先祖のミイラ

南北アメリカ地方の展示で特に注目したいのは、15世紀のインカ帝国で作られた「チャチャポヤのミイラ」である。この地では、祖先のミイラをコンドル湖対岸に安置



↑当時から猫は人々に親しまれていた

関係者から 高校生に向けて

文化庁長官の宮田亮平氏は、「今回の特別展には、学生の方も多くいらっしゃるでしょう。その際には今回の展示を見て、人間の普遍的な『生と死』ということについて学び、『生きる』とは何か」と考える契機としてほしいです。そして、日々を大切にして生活してほしいです」と笑顔で



↑「高校生がうらやましい」と話す宮田氏

語った。

また、開会式では「現代では医療が発達し、人々が『死』から遠ざかっていくように感じます。しかし、寿命が延びたとしても『死』というものは誰に対しても平等に訪れるものであることに、変わりはありません。今回の特別展『ミイラ』では、展示を見た人々が『死』と向き合うための貴重な機会となるのではないのでしょうか」と話した。

国立科学博物館連携推進・学習センター学習課長の池田真信氏は、「今回の特別展では、ミイラ



↑「気分転換に来てほしい」と語る池田氏

監修者が語る ミイラ展の魅力

国立科学博物館の人類研究部人類史研究グループ研究主幹の坂上和弘氏に話を聞いた。ミイラの魅力を探ると「通常なら存在しないはずの肉体がそこにある、という驚きですね」と話した。



↑「復元には最新の技術を使っている」と語る坂上氏

また、特別展の開催にあたって「ミイラの輸送が最も大変でした。皮膚が水分を含んでおらず崩れやすいため、特殊な薄い網を使って輸送しました」と語った。(来島)

編集後記

特別展「ミイラ」での取材を経て、ミイラとは「死」を表すものというイメージが覆されました。人々のミイラを作ることに対しての考えや込められた思いの違いに触れることにより逆に「生」についてもミイラから学ぶことが出来たと感じます。(勝久)